

函館ソーシャルクリニック

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター
センター長 齋藤 征人

本学では、2005年に函館市と締結した「函館市と北海道教育大学との相互協力協定」にもとづき「函館ソーシャルクリニック」を展開しています。これまで本学では、函館市内を対象としている各種の「地域プロジェクト」の授業等を包括的に「函館ソーシャルクリニック」と捉えてきました。

こうしたなか、2021年度末に函館市南茅部支所地域振興課より、地域協働に関する相談が寄せられました。世界文化遺産がある漁業中心の南茅部地区において、学生が地区内の漁業者宅などにホームステイし、漁業体験等を通じて地域に溶け込み、地域住民と連携しながら、地域課題の調査・把握からプロジェクトの構想・実施まで主体的に進める取り組みの提案です。このことにより、学生は地域で活躍する上で必要な実践的課題解決能力を身につけることができるというものでした。

そこで本学では、南茅部地区を実習地としたソーシャルクリニック・モデルの展開について検討した結果、「国際地域イノベーター人材養成プログラム」の専攻科目「地域づくり支援実習（P52・5章 科目概要⑦にも詳述）」において協働することとし、2022年度夏からの実習開始を決定しました。具体的には、漁業就労を通じて地域に溶け込み、学生の柔軟な発想と行動力で地域の課題抽出～ニーズくみ上げ～課題解決のアイデア集約・プログラム開発などを行いました。

実習を終えて、学生たちは、南茅部地区の魅力を数多く感じることができました。その魅力のなかには、地域住民には気がつくことができないものもあったようです。また、長期で滞在したからこそ見えてきた地域の課題についても理解が深まったと言います。地域に滞在し、就労体験をしながら地域課題に向き合うことは、学生自身の実践的行動力を養うことができる学びの機会であると同時に、地域住民にとっても自らの地域を見つめ直す機会になります。学生たちの存在が地域づくりの支援につながる実感を持たせたことは、本学にとっても大きな成果だったと言えます。

函館市南茅部支所をはじめとして、実習の実施のためにご尽力くださった南茅部地区のすべての皆さんに感謝申し上げます。

■実習を振り返って ————— 地域政策グループ3年 猪狩 真央

実習に行った当初は、学生が考えられることを、日々地域のことを考えている人たちが思いつかないはずもないと思いき、発言することが少しはばかられていました。

しかし「学生」という比較的しがらみがなく、地域のソトの人間が発言をすることは、良くも悪くも注目されるし、人が関心を持つきっかけになるのだらうと思いました。南茅部支所も、その意図で実習を受け入れてくださったのではないかと感じる場面もありました。

実際に私たちが地域に与える影響は微々たるものかもしれませんが、地域の人が考える機会の少ない10年・20年後を、少しでも意識するきっかけになったとすれば、この実習の意義はあったのではないかと思います。



昆布の直販加工センターでの実習風景

令和4年8月24日 函館新聞 3面

縄文遺跡群見学や漁業体験

北海道教育大函館校の学生ら人が、22日から函館市南茅部エリアで「地域づくり支援実習」に取り組んでいる。21日の12日間の、同地域の旅館などに泊まりながら、世界文化遺産に登録された縄文遺跡群の見学や漁業加工作業の体験、飲食店での販売実習などを通して、地域振興に必要な課題を探る。

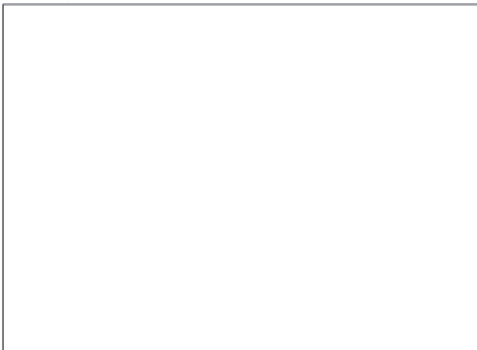
(小川 綾子)

地域の活性化策探る

函教大生、南茅部で実習

同校では毎年道南各地で農家などの支援実習を行っているが、南茅部地区では初めて、22日は実習に参加する3年生の猪狩真央さん(21)と2年生の島倉舞世さん(19)が市南茅部支所を訪問。同支所長で世界遺産活用推進室の池田敏春室長は「南茅部は道内有数の漁業のまちである」と加え、世界遺産も有する魅力あふれる地域。一方で高齢化が急速に進むなどの地域の課題も抱えている。若者の視点から将来を見据えた地域活性化のヒントをいだけばうれしい」と話した。

宿泊先となる旅館や実習先の漁業者の視察を実施。



コンブの加工作業を見学する、猪狩さん(左)と島倉さん(中央)

コンブの加工作業を見学する、猪狩さん(左)と島倉さん(中央)は同支所で支所長との意見交換が行われる。

「コンブ漁師の高谷大貴さん(大船町)の加工場では、手作業でコンブを切りそろえる様子などを見学。高谷さんは「実習期間中は早朝からの作業などを体験してもらい、漁業についての理解を深めるとともに、新鮮な意見を聞かせてほしい」と話していた。

また、二本柳旅館の二本柳芳樹社長(豊岡町)は「せっかく縄文遺跡が世界文化遺産登録されたが、今はコロナ禍で一般の宿泊客断っている状況。(再開後は)外国からの旅行客も増えを願うので、受け入れる際のアイデアを出してほしい」と語った。

北見市出身の猪狩さんは「函館は晴光の町というイメージが強かったが、今回の実習を通して漁業の重要性について学んでいきたい」と話す。十勝管内中札内村出身の島倉さんは「実家は昔、農業をやっていたが、漁業に関わるのは初めてなので興味深い。新鮮な海鮮料理が味わえるのも楽しみ」と笑顔を見せた。

本格的な実習が始まった23日は、午前3時ごろからコンブの加工作業などを体験。仮眠を取った後、構文センターや垣ノ島遺跡などを見学した。最終日の12日は同支所で支所長との意見交換が行われる。